

## 巻頭言

## 協同労働実践交流全国集会から

川原 隆哲 (センター事業団常務理事/協同総研理事)

労働者協同組合法が国会で審議され、法制定された。この運動は多くの人と長い歴史の積み重ねの中に生まれている。法制定された原動力となったのは、法制化をめぐる論理構築、その下でのロビー活動もあったが、何よりも現場の一つひとつの積み重ねと先人たちをはじめとした多くの人たちの活動を、様々な人に見てもらいその中で私たちが生み出そうとしているものを共有・共感していただいたことが大きい。その根底には、様々な運動と対話があり、多様な仲間の理解と協力があつたからこそであると考えている。

個人的に思い起こしてみると、私は労働者協同組合で働き24年になる。大学時代を含めると大学4年生、修士2年間を合わせ27年間、労働者協同組合のことを考えてきた。驚くべきことに人生のなかで、労協を考えながら生きた人生の方が考えてない時期よりも長くなってしまった(同じ年代はみんなそうだと思うが)。

大学時代は本当に暗中模索であった。私にとっては、見えるものを研究したのではなく、見えないものを研究テーマにした。それは農林業に軸を据え、農山村の協同の取組であった。いろいろな研究を選ぶ仲間がいる中で、とても不思議な研究だった。しかし調査に行くたびに農

山村の生活と厳しい現実には嵌っていった。嵌れば嵌るほど、なぜこんなに日本の発展は農山村を犠牲にして成り立っているのだろうと感じた。現実には多くの農山村地域の実践が潰れる憂き目を見てなぜかどんだのめりこんだ。その感覚は研究と別に、農村文学やルポルタージュを読み漁る情熱になった。きだみの『気違い部落周遊紀行』、石川達三の『日蔭の村』、スタインベックの『怒りの葡萄』、鎌田慧の『自動車絶望工場』、松下竜一の『砦に拠る』、本多勝一の『極限民族もの』、ベトナム、カンボジア…そして宮本常一。今、目の前に生まれている事実をどう見るか？それぞれの生活があり、その中で知恵を絞り、戦いがある。私たちの生きる世界は本当に民主主義だろうかとも考えた。当時読んだものの中には、大学時代に出会った多くの協同の取組に感動はあるものの、小さく現象的で、とても大きな力になれるものではなかった。また作っては潰れ、広がっては解体を繰り返した。そして、その現象を観察することから、飛び込んで働きたくなった。

当時、都市を中心に失業者の仕事おこしを始めていたワーカーズコープの取組に自分の就業を求めた。当時の仕事は病院清掃や生協の物流の仕事であった。こ

れらは労働集約型の仕事で、その仕事で生きる人たちのやりがいや組織づくりで仕事の質が決まる。これは簡単なようでとても難しいことだ。運営やルールを一緒に考えること、事業の目標、方向性、新しい挑戦を一緒に考えることは大変だったが、なぜかとても楽しかった。「誰でも包摂する」といえばきれいだが、誰も侮らない、その人をそのまま受け止めることをしてきたようにも思う。それらの取り組みを通じて、誰もが主人公としての人間性を取り戻す働き方だと思った。病院清掃や生協の物流の仕事以後、2000年を前後する介護保険制度の始まり、2003年からの指定管理者制度で、公共事業の民営化が多く自治体で始まり、学童保育や児童館などの子育て支援事業、地域交流施設や居場所の施設の運営を行なっていく。その後2015年生活困窮者自立支援制度が成立するとともに、誰もが働く社会をつくっていくために、障がい者支援事業や福祉事業、就労困難者の支援事業、子どもの学習支援事業等、私たちの仕事は広がり多様性を持ち、大きく展開した。

しかし変わらないことは現場づくりや組織作りのあり方と作法だ。人は一人ひとり違う。それぞれの個性や独自性を持ちながら、その個性を生かしながら働く。今般、国会で採択された労働者協同組合法第1条(目的)には「この法律は、各人が生活との調和を保ちつつその意欲及び能力に応じて就労する機会が必ずしも十分に確保されていない現状等を踏まえ、

組合員が出資し、それぞれの意見を反映して組合の事業が行われ、及び組合員自らが事業に従事することを基本原理とする組織に関し、設立、管理その他必要な事項を定めること等により、多様な就労の機会を創出することを促進するとともに、当該組織を通じて地域における多様な需要に応じた事業が行われることを促進し、もって持続可能で活力ある地域社会の実現に資することを目的とする。」と書かれている。この言葉はとても端的に私たちの働き方や組織づくりを現している。

協同労働実践交流全国集会一日目(全体会)の6つの事例報告では、「一人ひとりを受け止めあう現場づくり」「事業展開へ利用者も一緒に巻き込む物語」「地域社会づくりにつながる物語」「まともでない現場が新しい所長と一緒に自分たちの力で再生する物語」等の実践が紹介された。二日目は50の分散会(1グループ4人から7人くらい)では4時間を超えて学びがあった。この集会からも感じたが人は本当に多様だ。組織のパーツとして人がいるわけではなく、一人ひとりの思いを結集軸にして現場や仕事のあり方・風格を学び、実践につなげていくことを実感できる集会だった。

多分この働き方は仕事を通じて経済が失いつつある民主主義を取り戻し、社会の根底を整えなおすことになるのではないかと考えている。

最後に國分功一郎氏の書く『来るべき民主主義』の中に「ハンナ・アレントは

『人間の条件』で人間の行為を、〈労働〉、〈仕事〉、〈活動〉に分類している－中略－一つ目の〈労働〉、これは食物や衣料品の生産など、人間が生き延びるために必要な消費財を作る行為。－中略－そのような消費財がなければ人間は生存できない。つまり〈生命〉という〈人間の条件〉に必要な行為。二つ目の〈仕事〉は人間が自然の中で生きていくためにこの世界そのものを作り替えていくことを指す。－中略－目に見えないが存続し続ける仕組み（保険制度、政治制度、慣習など）もそこに含まれる。〈仕事〉は世界の中で生きねばならないという〈人間の条件〉のために必要な行為。三つ目の

〈活動〉は人間がモノを介さずに行う唯一の行為だと言われている。それに対応する〈人間の条件〉は〈多様性〉である。－中略－人間は一人では生きていけない。人間は必ず多数人存在する。お互いにまじりあい、交流しながら生きる事が運命づけられている活動とは人間の交わりの事。政治はこの〈活動〉から生じる営みに他ならない」と書かれている。

多分、民主主義とはこの〈人間の条件〉と大きくかかわっている。私たちの協同労働の働き方、仕事づくり、ネットワークづくり、そして失敗や目的の実現はハンナ・アレントの言う〈人間の条件〉に最も適う働き方だと思う。